明治三十八年十月一九日購求

上イ 春 刈 廿 キ

明 617

阿彌陀經和讃

序

佛說阿彌陀經一卷

姚秦三藏鳩摩羅什奉詔譯

如是我聞一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園與大比丘僧千二百五十人俱皆是大阿羅漢衆所知識長老舍利弗摩訶目犍連摩訶迦葉摩訶迦旃延摩訶俱絺羅離婆多周利槃陀伽阿難陀羅睺羅憍梵波提賓頭盧頗羅墮迦留陀夷摩訶劫賓那薄拘羅阿那律等諸大弟子并與文殊師利法王子阿逸多乾陀訶提常精進菩薩與如是等諸大菩薩及釋提桓因等無量諸天大衆俱爾時佛告長老舍利弗從是西方過十萬億佛土有世界名曰極樂其土有佛號阿彌陀今現在說法舍利弗彼土何故名爲極樂其國衆生無有衆苦但受諸樂故名極樂又舍利弗極樂國土七重欄楯七重羅網七重行樹皆是四寶周匝圍繞是故彼國名爲極樂又舍利弗極樂國土有七寶池八功德水充滿其中池底純以金沙布地四邊階道金銀琉璃玻瓈合成上有樓閣亦以金銀琉璃玻瓈硨磲赤珠瑪瑙而嚴飾之池中蓮華大如車輪青色青光黃色黃光赤色赤光白色白光微妙香潔舍利弗極樂國土成就如是功德莊嚴又舍利弗極樂國土常作天樂黃金爲地晝夜六時雨天曼陀羅華其國衆生常以清旦各以衣裓盛衆妙華供養他方十萬億佛即以食時還到本國飯食經行舍利弗極樂國土成就如是功德莊嚴復次舍利弗彼國常有種種奇妙雜色之鳥白鶴孔雀鸚鵡舍利迦陵頻伽共命之鳥是諸衆鳥晝夜六時出和雅音其音演暢五根五力七菩提分八聖道分如是等法其土衆生聞是音已皆悉念佛念法念僧舍利弗汝勿謂此鳥實是罪報所生所以者何彼佛國土無三惡趣舍利弗其佛國土尚無三惡趣之名何況有實是諸衆鳥皆是阿彌陀佛欲令法音宣流變化所作舍利弗彼佛國土微風吹動諸寶行樹及寶羅網出微妙音譬如百千種樂同時俱作聞是音者皆自然生念佛念法念僧之心舍利弗其佛國土成就如是功德莊嚴舍利弗於汝意云何彼佛何故號阿彌陀舍利弗彼佛光明無量照十方國無所障礙是故號爲阿彌陀又舍利弗彼佛壽命及其人民無量無邊阿僧祇劫故名阿彌陀舍利弗阿彌陀佛成佛已來於今十劫又舍利弗彼佛有無量無邊聲聞弟子皆阿羅漢非是算數之所能知諸菩薩衆亦復如是舍利弗極樂國土成就如是功德莊嚴又舍利弗極樂國土衆生生者皆是阿鞞跋致其中多有一生補處其數甚多非是算數所能知之但可以無量無邊阿僧祇劫說舍利弗衆生聞者應當發願願生彼國所以者何得與如是諸上善人俱會一處舍利弗不可以少善根福德因緣得生彼國舍利弗若有善男子善女人聞說阿彌陀佛執持名號若一日若二日若三日若四日若五日若六日若七日一心不亂其人臨命終時阿彌陀佛與諸聖衆現在其前是人終時心不顛倒即得往生阿彌陀佛極樂國土舍利弗我見是利故說此言若有衆生聞是說者應當發願生彼國土舍利弗如我今者讚歎阿彌陀佛不可思議功德之利東方亦有阿閦鞞佛須彌相佛大須彌佛須彌光佛妙音佛如是等恒河沙數諸佛各於其國出廣長舌相遍覆三千大千世界說誠實言汝等衆生當信是稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經舍利弗南方世界有日月燈佛名聞光佛大焰肩佛須彌燈佛無量精進佛如是等恒河沙數諸佛各於其國出廣長舌相遍覆三千大千世界說誠實言汝等衆生當信是稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經舍利弗西方世界有無量壽佛無量相佛無量幢佛大光佛大明佛寶相佛淨光佛如是等恒河沙數諸佛各於其國出廣長舌相遍覆三千大千世界說誠實言汝等衆生當信是稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經舍利弗北方世界有焰肩佛最勝音佛難沮佛日生佛網明佛如是等恒河沙數諸佛各於其國出廣長舌相遍覆三千大千世界說誠實言汝等衆生當信是稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經舍利弗下方世界有師子佛名聞佛名光佛達摩佛法幢佛持法佛如是等恒河沙數諸佛各於其國出廣長舌相遍覆三千大千世界說誠實言汝等衆生當信是稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經舍利弗上方世界有梵音佛宿王佛香上佛香光佛大焰肩佛雜色寶華嚴身佛娑羅樹王佛寶華德佛見一切義佛如須彌山佛如是等恒河沙數諸佛各於其國出廣長舌相遍覆三千大千世界說誠實言汝等衆生當信是稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經舍利弗於汝意云何何故名爲一切諸佛所護念經舍利弗若有善男子善女人聞是經受持者及聞諸佛名者是諸善男子善女人皆爲一切諸佛之所護念皆得不退轉於阿耨多羅三藐三菩提是故舍利弗汝等皆當信受我語及諸佛所說舍利弗若有人已發願今發願今當發願欲生阿彌陀佛國者是諸人等皆得不退轉於阿耨多羅三藐三菩提於彼國土若已生若今生若當生是故舍利弗諸善男子善女人若有信者應當發願生彼國土舍利弗如我今者讚歎諸佛不可思議功德彼諸佛等亦讚我不可思議功德而作是言釋迦牟尼佛能爲甚難希有之事能於娑婆國土五濁惡世劫濁見濁煩惱濁衆生濁命濁中得阿耨多羅三藐三菩提爲一切世間說是一切不可信之法舍利弗當知我於五濁惡世行此難事得阿耨多羅三藐三菩提爲一切世間說此不可信之法是爲甚難佛說此經已舍利弗及諸比丘一切世間天人阿修羅等聞佛所說皆大歡喜作禮而去

佛說阿彌陀經

和讃

阿彌陀經和讃

善導和尚

極樂無爲の樂しみを
つねに佛と倶にして
六時に法の雨ふらし
華ひらけば佛を見たてまつり
下ろした山海ひの種は明德佛性ありと
山海ひと生ずる田地父母
は菩提よりおこりて往生
をうらぐ親よりて
今更の法久しくて
乃至まさうひ更の名字一
よあれ、ちひ名門の僕よ
帝人よりまでと明德佛性の

されば陰徳あればかならず生れつきの福分と
ゆるすたくはへもなくて耕しても耘つもあまれ秋実
むかしからむくひ徳ありて果ひあまれなかりき是を
福分と申す次ところ古今も貴き賤きも知ることなり
なかりもやすき事なり万人のさいはひを称へはなかりし志のいは
あまねくしるものは今の陰徳仁性を守りて人倫日用
の外小形か小事つゝく二六時中にいとなくしておこりて
形ところ人とともにひとしきのことなれば身を節て生れ付ある
福分ともなくしてあまえてあやまちをわきまへても家の法
なかりし火よ形りも江河乃魚の慈ともしらずなかりし
或人乃いはく明徳仏性の徳ありてなきにより顔富

此人命なかきのみならず日夜にこれを生まれ
つきの福分かおのづきとなし又いはく先祖乃積善の余慶を
うけてこの身一代のはかりにたちまはりてもなを
らば子孫までむくひておのづからしのあり悪ことはしく
また一代のうちにてむくいあらば積乃福分あまりいれば善悪
このあらはれてらず身か楽に子孫の繁昌たえてひとすすめてそむ
かゝへききことなりとも身にかはりひとえむとおもふ
子孫のゆかりあはれひそかにへ主人みな人乃親の情
まつまつ子孫によりてへそてかのそへとまつへる
迷ひへて悪をなしためからかくして子孫のためとまでうらん人
身より錯ひてことを悪をましてなにもいはゞしき

きまりありたとへバこの人ハ命なかく富さかへて福
ひハあるといへとも身やまひかちにして子孫たえなとさい
わひをはかなくも死するもありまたまつしき福ひ有を
おもひは式の人いにしへの徳佛性の所以殊ありてこそ福ひ
とはさなる人も其一代ハ前生の縁りこれハその生れつき
の福なりといふこゝろ也又ハ先祖積徳の余殃よりて来るを
見る一代の福ひをもとゝしてこれに先祖の余慶をかさねて
積善の余慶又ハ先祖の福をはしむるもありまた善をもちて
いふは身にもちひらき祖の福ならされとも悪といへく
つまりては福ひをうくへくハ悪身のさゝへんよりも子孫
さかへんことを祈るハ諸人の親のならひなれは是をほとも

おもふへきことなれとも又ひとへに理をとりてもつさ
ふかくよきことをするをいふ前世徳佛性の所以也
まれは身やまひなくして子孫のさかへるの福ひあまたハ富貴
栄花の外のりさりハ福ひとつを人さきとおもへは式のいかく
今時の人ハ現世安穏後生善処と祈り願つて前徳仏性の
外なるを後生仏果の福ひあるへきやうやくの徳佛性
の後生りすなはち後生仏果をもとめ此所のほいんとし
きはと生後は生をえてんまりまた生たんなけれハ此身の
ひふしもと生のそなへきなれし後生にんなけれハ極楽
樹の果をうくるものなり肉身ハ生死ありといへとも
生死なきをまつへしと生れぬさきなるは生のんかのちを生

又人の法佛性あらはれて清浄安楽の身となれば後生の
仏身即極楽の仏果に至ると生死の三毒をのがれて迷
妄くらき身には後生のくるしみを地獄のせめとうくる也
悟れば心見性成佛とて即是自性即是佛
慈悲即是観音喜捨名為勢至平直即浄土貪嗔
是地獄愚癡是畜生と教へ給ひ八十方仏土中唯有一
乗法無二亦無三除佛方便説と説給ひ唯心浄
土己心弥陀とこそ人ぞ無の法門みなこの理りとわきまへ
給ふに世の中の人必要の方便説と教へおやまられ候を
受て世る法は世法現世の福ひ後生の福ひなどと各別
の事をとなし無為無漏の菩提をとうとんて仏に成る無漏

の菩提の二つとはさとりの仏をと悟りすることなりとおもふは
よへの法仏性の悟りと捨く境よ外之法の悟りとよ
とめく未来仏の脱と求めなたくへ八本まてく至と求めなかこ
とし之れ法の法仏性の悟りの縁あまた縁の二く見の
かく仏果にいたることは明法仏性の悟りとつめ三毒の心を
捨とたる外のさまの悟りいろくとはとめくく三乗よ仏果
と称ふまてもなとも地獄よおとり如来実現にもして
なやむし染乃武帝も達磨大師にあふてよく我得
ほきてらるもこれなこちとはそり経を写し僧を度する
を数とをくだいの積の功徳あるべきやと達磨こくへてそれ
はまくく人天の小果有漏の因にして影の形にそふごとく

身をもとゝいへ大志実にあらざれば功徳なきまゝ也たゞ浄
知識の法行功徳ニ云ふなりといへり武帝ハ為ハ善
相にあらず天下の我とはゐやし万民とうしゐし見
地ごくの業をつゝて佛果を求めるゝ中さのとを慶大
師わりまゝ語ひ数海親切なりといへ大武帝聖心に敬
まさとなまわらずいよ〳〵為ハ善相に婦ある事
民とうし見るゝにつゝ天下大に見てまゝ語ようへ
死なまゝ現世の果を見ゝ事ハ未来を知るまゝハ
生ハ有ゝさとうとわりまゝにあさましお車のくるゝ
ゝに後車ハいまし見なれハ仏道法行の人ゝかゝ
見ゝ用心あるへきまゝなり

鑑草巻之一　孝逆之部

孝を孝行之逆を不孝之孝行なる人ハ天道
福をあたへ不孝なる人ハ天罰をくるしまゝを
罪といふ女を史乃姦を姦姦とし史婦一体
の理なるゆへに史乃父母をもゝ父母とし姦父母を
大切にあらずふんとうりして史と一味に孝を盡すを
婦人の孝行とは此孝をよく行実ある人ハ天道
見をもとけめくゝまゝ姦に人も又見を見数を
志ゝのこなりぞ百福乃あつまる所にして子孫見に
よりて繁昌を不孝なるものをバ天道ゆくこをそ
まゝによつて人又こまをとなるとうなりしむ志

うのこなりけるまろげ乃禍先まるとおこりる孫
を又先によりてもいむを又孝行を作仙成
仏乃修行不孝を地獄乃業ともいへり其
人乃を明徳佛性をもて根本として生まれる
物なれバ雖も此性なきものハなし此性ハ人の根
本なるに依て又本心とも名付たり此本心ハ光敬せ
ざる不なき物なれハ本来姑そうなるに婦と並しを
愛し婦を加なるに姑に孝行なることハりえるが
ゆへに雖人とも孝行とかむまは悦び不孝光
そしまでいふ海さまあらく不孝なる人も陽心な
海人乃おまてそうなるに孝行をふりあるまで

を志しといへ其子孫忘ひまごす海よひによりて本心を
くらましよめハ物数の陽心に迷ひて本心をくら
まし乗りあさましきん行あるゝそ是婦ハいと
おしく大切にしふ子乃妻なまバ志しとの本心ハいけ
ふしを愛を海物にさまれり媛に悪こさしふ
をくなる心始めよりあらむ何乃ゝめ母りとりむ
うへきやとりむふる時に母くむ心ハかもなけまた
ものつゝ乃親のなりひにて其子をこひまごに
よりて婦乃容義女徳のよく そなるらん
と我祢へ里女ハ女乃万の志をさ之徳を心にて男の
とこなひ乃屋ゆうに居あることゝ容徳女徳乃

よくそなりたる世ハ世よまれなる物なれバ婦恋
そなりたるする所ハ世むるんなりしきに俗
慈しき恋も本人くらく日にそい悪むんなこ
ひてそのあいしらひうとらしくく次第り
うげのうまさもあしく物行ぬ相文人乃婦なる
志も本来人乃家へ行始よしとに逆ひ不
孝をせんとなくむんハ孝もまましひたもう
よしとの氣にいり更無もよくしまれんと思ふ
んのかりあれ孝行乃本人へ志れた常の人
ゆく他人をうらはれ是を悪む物と
淫人ハ此人即物乃淫人といふ物之此物数

の淫人より志しと我乃是バ志しとも文他人なれど
さゞめて大切ハ志ひあるじとむかへたる淫人ゆき
所ハ志しとのうどしきぬりをんくしたやうく
こそとん風しらぬうへハ文新乃うまさよらぬ
るをもしさなとの告志しまれハむのさまざん
さうさちぬくさうさちたるんなて志うとにつかへ
ぬるにより思ひ嫌り覚んしまうとしくなりぬ
かどなきたまもさいる中なるにましてう恋を物
つへなれバ志しとのめくこまもしくふくなれバ
よめ乃うぶもいやましまりてつゐに不
孝乃よめとなりぬ此とかりをよくまさまへ

志うと乃本心をかならはれを慈しミ愛
しまふ物へと心得て物象乃痛心を歩とけ姑
れあくがいみちを時はりちろん孝行乃まと
を得しもし又志うとみちなきあてがひあ
らばこれは志うと乃なんしんを何らはれ身
まもらぬと何るゆへりしとの情識うご
きてかくを愛を身をかりこて家何やまちを
あらくめいおく孝行れまとをつくしかりそめ
まを志うとをとうめうらむべからは万一とうめ恨
むる念おこりなば天居に捨られ人を慈まれ禍をまのき子
孫のまいぞまべき邪心と恐ひしミ本心の孝徳仏性を何き

いうにまへしかくれとくらくなくしてはのまなの
まの本心と何きらうおし孝行の夜ことあまは志う
をかならす後来乃情識とけ本来の慈心明
よなりて家内和睦し子孫なんしやうめてかたの家
無しむかし文安懸といへるさとの百姓つまをめせ
まりその後まよりしぎまくまれをしきをやを
のこをん志うとあまは後へがりこけかりなまは志うとめ
ら又おくこきらへまをおとこかりへおくこうへまは志うせ
めの後れなきまをとつげるくなきなけきぬまうしめる
おとこきくもいまさりけまともあまりこひくな
きなけきをなまくおとこある夜ひそうにほさへ浅

かひろくかくしおとゞめさせてはゞかりにみせく、あんちのなげき
をさゝるゝあまきは母とこころをべしと誓ひて、さらに
みをあしらへずありしか、あらんとおもひあまて一ハつまのこ
ゝろをさゝへてうれハかりの鏡をそてろなりといふたとえ
かいりく母氏あてしがひご孟宗なるを、かとになりさいしょ
よをしのびとえしさほうハいぐしきれハあんち
おのれ一月二月のうちどよく孝行とはくしてあんち
ゝ孝行なきことをしとめの孟宗なりとこたえる
孝行とよどりきこゑぞくのちあんちのなきことゞく、み
しといふ妻ようこえてうきてより一月ほとのあひさ
孝行とつとめるまはあしくとも不来善ひあるりのな

きはあしくかくべきあらくがひよくやういぎとりを
のちおとこひそかに作まをもひく母のあてかひいり
とうふつまおかどゆりへしとこゝろふまゝ一月ありさ
おとこひそかにはなとすびくらすれハつまおもかへて
いまハすでしもあしきまゝあくまの親うりしとれらに
かまくれ妻はゝもあるべしといふ云附おとこ刀を
ぬきいかりていく盗んだ世界よへまとゝろもものあ
あとさくやつまのいうことをきかぬ男曰母とこゝろ
そのあるとてんるやはなのいかくいものきはうすおとこ
曰人倫の孝行とおもしの君ハ身のところして
もひくいふしつまとめとるハ不来親よつゝへ子孫と

そうそくせんさまめありしかなよなんち孝行乃はなめ
ねくて却てしうとめとうかまれよ大恥とすゝむ
びかゝれとおしらへしてすれなんぢか顔をきけるく母の
こゝろをなくさめんゝめなりなんぢよかゝなをかんきし
せきけるくすつなしと思ひしかとをなんち孝行のつ
とめあらバ母の慈心あらいるへしまれよかつて母乃
なんなくして科乃なんちにあるすをきゝしめて後
きけるくすつへしと夜月の命をのべるなりといふ
後よおそれなしひなひくまりつゝ後ゆるしまへいま
より毛頭偏怠なく孝行をしたとむへしといふへし
くありゝこゝ後ことをよくかんてゆまして今りまゝ

しうとめよめ乃申おやとまよりも和睦してこゝ名
そうくしたへくりこゝ後もてかんきに無事にして後
のへかゝれしうとに天下になりけるすなりそうくよめ此不
孝によりて しうとの名まてもけがるゝなるへしがん
めのなるひまて利をかんぎきはすゝまゝ次宮をしらされ
しあるゝ事なけきハ此孝のつゝ名三千弟一也して
其律なをこきを勢もるゝ事をこゝろへゝ此孝の勅心
をいまゝめ孝行の功徳無量にして上をなく外も勅
きるをよくつゝまへ孝行乃すゝめとしなんとあき
らかにし孝行をつとめしけむへし

○むかし麗水に林侑といふ人ありそのつま乃周氏女

かきとき聖人乃書に通し儒道を信仰して行ひ
四しかりけれとかるゆへに姑にしきいめて孝行の誠を
尽くせり男子一人まうけて後林侑母にさしたちむ
かしく姑ぬきたまの立し時よりも姑に孝行の
誠をはくし毎日三度乃食物のるゝすまつかり調へ
ていとくめくりさる子成人してこのめとめられ日にこのめ法
徐氏も又周氏につかへて孝行の誠あるゆ周氏の
姑より孝行なるに露も差さり々り徐氏男子
とまり定老と名く定老生れてくいまゝ一年にも
かゝれかに天下乱きたりこゝも盗にしせまらきし
し雛候かりしかは林氏定老と沢乃中へまて盗

とおせられくさくれにくりしあひくに周氏徐氏ハ東山へ
かくゝ思ひくるゝ林氏か討れたるとも志らす盗乃まれ
まをとうくひ山とおくく林氏定老と暮ひけるこゝろ
まゝ盗にし逢ぬ周氏かなし老ぬきハめにもかけ
徐氏にせまりてくとりこにをんとせしを周氏徐氏さの
起るにまに手をとり死なんとこゝろにとなけきぬきハ盗も
ひうなくよりつかされとも法ゐにのれ為くもかんしさ
ましを周氏はしく信仰してつかへける神明にいの
ゆゑれハ神明にすけにつくくこれとも志らす盗を
おひちして雛なく乃がれくぐりかくして道にまま
よひこゝかしこにさゝあらひ沢のおとりとすきけれハ

沢の中に定老をそてくれてあるけるを見たけるを一とせ
ゆきをさくぬ赤子といひ盗賊兵乱の中といひ人家
く虎おほかえ乃住居をなが聖原沢といひ安穏し
あるへきなりしかとも周氏徐氏乃孝行人とうご
し神明の加護まや有るんいかにも行くかなく泣る
まあく母まいるれることくあるくぞあるける周氏徐氏
よろしひいる紀とりてかへりぬそのくち植氏の戸を表
為ひ制してよく葬事をぬ兵乱しけまりなく孝行
周氏徐氏ちひしき日を送りありし徐氏きはめて孝行
なりけまは年にあひ慰えて世事ハあやうとしき
なり此時徐氏をいまゝこ年はかりまくかゝしもまぐれを

まいりれなえんあまとなるくちまる人もおかくありけ
れともきくをいまゝにひしよりは周氏は孝をそつくしけ
定老おきれきうち病おほかわしを周氏徐氏やうく
よいさかりて人と成ぬ年たくるにしさうひ学問をもけ
まし才徳をくれるまは潘楽といふ人そのまゝしき
をきらはしをむしめをめあはせられそり定老の妻の
潘氏も又孝行あまりありさくなのまゝの富者を
けられ衣裳も乃つくろひまて定老の妻ハ此ちまにかり
久周氏徐氏ハ此人さく孝行なるゆへまくひなりを
里徐氏こしよりさくのちよろしひ行歩しかなはれ里
まるを潘氏よるひなるにをもなれをはへぬる神

慈母の赤子をそだつる事にことならずして定郡縉多く内裏
へめしあされ秘書監といふ位にあがり定者公父母にも
贈官とくらゐをたまはりそのゝち子孫うちつゞきたる位大官
にあがらぬ人なしこれ是皆周氏徐氏潘氏二婦人之
孝行陰徳ある餘慶によりてかくのごとし
林侑はやく身まかりて兄子まだいとけなくして幼孤なり
あつかれどもさてかんまへハ林氏の家まづしきゆへに
ねらひはきびしく蔭徳なす事もならず叔母ありかく蔭徳
なる事なれば周氏乃孝行陰徳あるによりてかくのごとく
の徐氏の孝行とまとしき又孫婦は潘氏の孝行とを
まねび三婦人乃孝行乃餘慶によりてかくその子孫

婦孀婦とうけ孫乃定郡なる位にのぼりて孫とくめ
てこゝろへあるも大福と作り出せりあまつさへひとへに周
し氏の孝行まて基とはじめたる人ありて蔭福乃事
ゆるくさへひらくめでたく禍と転じて福となしぬまでハ
ますて福あつきまに孝行の善積りあつハすて福を
かろへりしに多くもうらみ思ひもあくがれしかくしく眼お
ひくひいなましは禍ありのおすかゆへありまく禍ハ子
孫によむまじとうかゞふまじく思ひあはすこれ
孝行とつとめ楊この大幸し
延平府に杜氏乃娘の兄弟三人あり母一人ありしを
三人して一日づゝかはりてやしなひけるこれ農人なり

それに皆その妻によせて面しあひたり三人のよめ皆
慳貪邪見なる女母て吏たかうさくに出たるあとに
てはこ都やしなへ人面しあへとおしこあひける程にそう
をいたまどいふあさまし記食抱をたに志かくすゝめにこそ
母たへかのくいかれ御川母を分をなけれやと抱ふ
ゆゑもひくなりき嘉靖十年の比とのう七月十日
あまり乃ゆなりしに白書偈り宛ク記くり記と
つかこなり裏にそていなつき乃光ひしさきにおひて
しくひかり眼もくらむはかりなりけるゆ三人乃よめん
かうべハなのことく母をくかたより下ハ一人ハ牛となり
一人をなしなり一人ハすことなぬ此事かくれなりしか

ゆゑ抱乃ゆゑ餓男女ゆゑ家よくんぞ面してかりかくたちを
さしまるゆ月をかさめて終に命くたんにまり里人恐に
つ記たんにあらうまひろめてく天下此いましめこれしぬ
志うとに孝切とはくをハ人乃人ゆゑ心行なるに
こまに紙をてく貪欲無慙なるを面ことに小いぬ畜
生乃心切なるハ生とひ人乃此形を変せしとも人
乃にあらに畜生躰里さるハかくのことき人とハ読
よも人乃皮をかふりたる畜生なりといへ里志ゆゑ
此三人の婦犬畜生の心切さくに面しきにより
上帝雷公にこことのりして人の皮をかきこり畜
生の本体をあらはし人乃皮をはりたる畜生とも

とこしめ事の物なり家も人をよくいましめて皮乃
人たるゝをそのむべからす不孝にして畜生のん
りあるへきたとひと生まて畜生の形にし変せ
すとも菊来畜生道におつへきなり此事よく
よくわきまふへし

○開封といふ所乃ある翁に男子二人あり兄にはまでに
よめをむかへて家をまけぬ弟にはなかなかしむまめを
いひ名つけしていまたむかへさるしが朽から附の帝気に
好こゝにまひらく天下乃美女をえらひ出しいひなづけせ
しむまめよくきまたれきまは其父母なしえらひや
らまなんとなけきていへきめとり給はれとぞうなが

しける翁もさは思ひきれとも家まろしくてなひかた
しまたことなんはなかなかけまはせんかたはさて此る富
なん乃もとへゆき僕となりて穢をかりよめとり乃此
いへとなしてむかへとりぬよめ夫の家にいりて姑には
まかんくぬまた翁をかんしまうこかりしく思ひ夫にこひ
きれとおりとはたちてあるさす姑にこひぬまはなる
のまゝにかたりぬよめおとろきないてまたあに翁に
人乃至つことして一日もいりて居すらんとていそ起
乃至なすともせ親のかたへ此かりしさかくしたまありて
翁をうけかへさんとおりひ立ぬるまゝ此手乃至と志ら
におさて穢をかり給はれとぞいひをとりける父母

その孝なるものとよみして殘をとてのへ手を見まうへ
てくへ　けまいなのなんなりしよろこひくらは日もくれ
ぬ時なるハゆきて箱をうけくくへ里なへと夫よいひ合て
殘をはゆり此国とりよおさてくり杉しも兄婦こさる
まり弟婦つぶさに此事をぞかたりける兄婦ハまと
より不孝よして貪欲なるくせものなりしかとも
ひさくとうくひくくんの殘をぬすこさりぬ弟よあ明る
あしき殘をもとめこれハ詎もなりくりこいいかとた
ゆへ　しまとも得る事なし殘とうしなひてく箱
をおくなハさるゆへ乃なりしきのこれらにこひうけそる
殘をむなしくして父母へことゞんなさまをなげきくも

おゝろなしぎる杉りし又夫乃くはじめいうけんといひし
かともまた殘をおしくおもひてく盗りしことをせてかく
しけるとうこうふろのみへけまだうたくせんかこなく
むひふさがりくまとひくびまこくむなしく次ぬもろ
こし乃さはしまてかぐしを棺よおさめ国とへてのち背迎べ
りしをくりぬまた新婦乃むなしきかぐしを棺
母おさめまこよりよ紀所をもとめて他所よをさくり極
すぐよこ日をへてく始里やこしぐをとてのへ兄婦よをさる也
ゆかりし拔よろなへしめくり兄婦棺の所へゆきゆくへ
きれとの君のゆさく偽よかこなりさりぎ面ありてくすさ面
しかりけるの門よよふしまゝ始れ兄婦なりと思

しかとをうれものごしのあぶるゝをとうとうひ戸をへしそ
くそれをと問きれいまきは矛婦なりとおもふ姑こゝ
ねのまきをだらすやとすれまよりこれをのぞきぬき
しにはまきあらて満さしく矛婦なりしかれたなをとう
さうしくおそろしくて人をあけめ門をひしきて母は
人かゆうまいりとこふ満さしき人なりとおもふ姑のいわく
何身ひなしく成くすそまこ日まなるまぬ何まよろて
かゝよのまゝかへるまぬるや矛よめおもふくまれもしめねる
がつしくなりしかかゝなりれをさまりきをとにんさあて
おぼゝにてにあるとのふ姑うましく物ぞ内へよび
いまなりしくよいさかり嫌しぎまは物ひ人をかゝひ按

を墨なる所まゆきて見まは搶のふさまあきて中まは
何もなりけるが兄よめ按のまへまひさまのきながら死
しぬ見れはうせたりし猿をまもらてあるけれ
めもあてゝまずす男れ毛ゝ何くそおほえ者御
兄婦の猿をぬすまこしに大なる罪こおり一つまは不
春の罷二つまは盗賊のつゝ三つまは新婦をころせる
法ゝ此三つの咎何まを王法のころを取なり三つの
うち一つおりしてをそれせめのがれがたきに三つまそ
おりしまる兄婦は法々なるそ孝行なる新婦は
却てひなしくなりこるにいたるまて人間の賞罰
沙汰なりあまは天帝いかりをうごし雷公に命

して罪あるか兄にあらんこゝろし孝ある新婦をよくかへ
らせまゐらせぬすめれ寝をまにもとせてこゝろ
ぶらさせまゐ事 微よきことの紀貴冠らくこ にとこ
やかれるゆ人胃れおまへきゆいよあしびこれをよく
かゝんさく人乃志らさるをこゝろさくあしかるまのしなとこ
思へ新無んをいまゝしめ志らしへきるゆなり或ぜん曰
新婦乃孝心神明の加護あるべけ遠いかやさしのさわり
ゑこゝ海しきるゆあり曰そうしして苦をあすりよハ新
そうに人乃志らさるやうしゆとわかんを才ことすれよ
てこと人よ志らまんと思ふハ満心なり満心なる所ゑ
魔縁とある魔縁あまはかあらす魔障あり

苦尺魔といへるも苦をなすと人よ大畧満心ある者
しまとし此苦よは大なる魔障あるゆをいまし
めらりされハ新婦乃孝心まことありといへともまた
げまて兄婦よかろくしくかゝりくるゝ魔縁
あるに似たりしかゆへよ本より貪欲乃兄婦新
婦の孝りをそのこゝ又言殘をむさゝりくじ魔障
をかし新婦害よあへりきれとも新婦の孝心
深なるゆよりけく殆よ天道乃めくこをかゝりまざハ
ひとひるがへしてさいかひとなせりしまにこれをかく
凡よくんぬてハそうに人志まに苦をとりあこあしやう
ろもちかんなりなるへし

常州にある村の百姓母一人あるけるが夫婦ともによく
だんなり母親に盲目と聞しかどもいかく孝とぞ
ほくしけるあく何ぞ耕に出ぬ事ハ出ぬ事にありてあ
しとうしきそていまうごだきあげさるに夫男ありて妻
と田にまりまびけまハ姑にしめしと教えてこしまいぞぬ
塩めしとこれあげめしつぎとはぐまとひるとこ あ
やまりくまるを始より 盲目なまハかんま
くるまあさいしめしつぎなりと思ひたくめしとうつし
をさぬこのあかりたくこまぬかんたくあさましき事にあ
思ひそまとも姑のかしまゆ とおもひはりて何
ともいまだこまんかれ 此 ゆと姑にまそてま

ぬ事をそのつきにけがまさるを夫にすくめまる男にまるのう
つりかけがれたくまさ紀而をとりあつめてぞ喰ける良久
しうして天にまかくりくらくなりてあらびたる人
乃而もかんまうざるやうになりぬそのくらきうちに こま
とも志らず婦と引ゆくやうにおぼえ けるが志づく
して天にれなの白晝になりぬあるりとこれハわが敵以
にまあるて頃とちり紀はやしの中にそあるける姑
と思ひ出りしかりぬまハふところ乃中にちいさ紀ぬ
の袋ありあけたくかんまは中に米三四升ばかりとり
くしけ一日のうてとあし明るかあしさ袋をかんまハ
まさなのこしく米三四升あり毎日これとも紀よりま

まゝ所くるまゝなりしこれをたゞしさして一代ばかりへかり
人乃常の情思ひの外乃事しまあつてはおどろきそこ
なひあることにあへばさくらものなりおどろきばかりの
所をさ氣さきてらんさは絶て本心をうしなふまゝつて
其事を忘れ當方なくていまゝじきるのともいひ相
しまゝじきまさをなしものなりし塩のまゝりはめしを
うつせることはこのこゝろをひとへ心ひ海ことのむ
しめなりとも大かたの人はおどろきばかりづらてやる
めのゝしなへしまゝ海によめとしておこやうに相に
いりこの孝心のはたらき誠にたゞひなれことなり
常に姑をたゞいせ川に思ふ其実母してたゞまゝ相

きゆへなりかくのことの孝心は天地神明を感動する
まれこなるまゝは即時しまゝ異意ありて一代の糧我
くゞしまゝなり老をかゞ乃て姑我ゝいせ川に帰りし後の
あく後をはたりしあまゝらりにまへし
滑州の酸棗縣にきはめてく不孝なるよめあり姑年老
て同もかんしざりけまゝは夫のうちになれ所はいよくあ
なとりかろしめて婢乃ごとくにぞもてなしけるあ所
夫の留ちるなるまゝし泣よめし此中にいぬのふんをまぜて姑に
しくめぬ志うとめこれをくひけるゝにおかひあしく覚し
てふらあしかりきまゝも形見乃よめいうなるをとゝ志こ
御しんと思ひくふ事りしてくしおきしが相とれく

そのみつりけまも知そうかよびてうれめしをとりあし
まハ何ゝそあるそこれよりめ乃まれよたまハかしと
いひけるをこれハ犬乃ふんなりこそ子あされはてゝ天に
あふいさく犬になげきさをびかり傷よかこなりすき
まじくいなひかりしかしぶしかりけるがそれいかひち
ゐ乃うちより人来りくゝよめの頸をきるとみこしか
かゝより志さハなのよめまて首る犬にそなりにかる
ゐ所のなり賈耽はるをもとてくゝんのよめをあし
ませこそ図中を引わたしてふたのをれゝいまのしめ
とせしまゝかり所の人、狗頭乃新婦といひてにのさ
ましきせもあしにそしけれ

音無乃むくひ谷にしてをあぐるうことくなまき
も音を思ひ音をおこなふよハかなしに音のむくひ
ゐ無をしひ無をおこなへしかるしを無のむくひ
されし弥り天地感應乃妙理なりかるゆへに人を
覺しうやまふるすかりちをのまをおしうやまふ
ところなり人をあくこあかどるハまれりち已をゆく
こゝのかゝるところなりさまハ酸棗縣乃よめ姑代
ゆくこあ所どりさくゝ犬のふんをすくめけまハをのまゝ
かゝ人犬と姑ぬ天罰乃懲をおといへども本来をの
まゝが心行によろさくまひくゝおるまハ姑をゆくこあか
どりさく犬乃ふんをすくめまるは畢竟をのまゝとか

ここあかとつくたとなるべしかくれこそのよめは
世にまれなるゆなきはかくのことくれのむくひもまた
世に尚きなり世間ことにある常れむくひ此かく
ゆくなるゆゑ次孝りなるなをまうけふ孝なる
ものそりなくす不孝のなをうミ孝りなるよめはこ
なくす孝りなるよめとむかへ不孝なるよめはかなく
をふ孝なるよめとめときりこきすかいらたのみを
もて始りすしめて犬のかくべとれな感應の理り
よかも世ちかぶれた習に拘ハてはきくしことはりと主
なりのまれなりおそるへしいまむ通し

○殷州の葉元贊がつま李氏名は善瑜年十八にて婦

しかはしめより舅姑にしよく孝りと聞くせりこれ
まづしくして殷夕をつぐ紀がくりきるかよく笑んと
ほくして殷夕は食せられとも舅姑にはよくこのへてを
すめくり一年舅やまひの床にすでにかきりと見
えけれとも如より貧しけれは醫師とよぶべき力も
なしかれしなせんかこなくて祁明に願をして身がい
まにせまくんと精誠にいのりきるとき夜の夢思ひ三
官の祁明世界をめぐりせしあふとて彼が孝心精誠なる
いのりをそしらせてきこしめしこゞけ天帝へ奏聞あり
ゆきは天帝勅感あり仰て舅姑にしハ十二年の寿命
をまし婦には殘八十万とあたへ二人のまたをいる

宮ゝのおせをかへしとみくとのりあけさくまでに名録語
よさるしこまへりとさぶられるつげのあけるがおくなく
舅姑病ハいへぬこそ故一とせありてゐるあしき門も
いまさ起くらぶるにぶしき故これも金あ所申ゝまゐん
てりこれをとりくさろへぬきも殘八十万ゝなりぬ
そのち二人乃ゑ為なのがわあまし者のつげ落
もこゞはざりけわそこなり乃よめ秦氏二十ばかりも
けるの日のありしきゝ両かせく舅姑ゝさらひも非
もこゞ不孝なりけるを李氏はひ〳〵吳息しかれ
ともきてもいきさりけるの天より李氏ゝたりし故
くぶしく病ハる日かゝなりすさ両しくさぶろき秦氏

孝ゝおもちてかのふ孝乃秦氏とやきこゝろしけるか
貧をいとひ富を祿ぶこそ凡夫乃なるひなるゝ李氏
夫の家乃まゝしきをさらしに常ゝ舅姑ゝ孝
行の誠をはくしまるゝ誠ゝ有ぶこれ賢女なるを
さてまゝ老年の人乃身両ゝ両をハ順様なりなと
思ひくたるの人ゝ親のまつらふ母を身かわりより
そこんと思へるゝ心ゝそべからしてよのつひ此ゝ
めハ舅姑ゝ後きしをのなきハ他人の所ふをとふ
らふよりもなをとうとう両へしさるゝ李氏身
かわりまたらんとのいのりまことにすぐひなさかく
心なり又秦氏ハ李氏がとなりなきハたとひ李

氏が異見なくた感化あるべきなるに豈ゝ乃実
見をきゝいれざるは大に孝乃いたりなり無しゝ
悪心無りの人もいまゝしめときたまうちは於
無とあらゝみ善にうつるべきだのこゝろまは罰を
こしゆゝし実見をやめてあらゝめたる時はその無
かたく定なゆへに其罰をうけんやかれなものなりけ
きは李氏は孝行乃至極秦氏は不孝の至極二
人様をなしへあるをおなじ日に禍福をくらべし
ものまゝ人間を勸戒し行へ天意のほどとよ
くよくかゝ見つ無し

嘉靖年に順天府乃百姓その母此久しくやまて

なやまけるをなけきて醫師をもとめてはやうじし
けまことを志れしもなく日を送りけるある醫師ぶ
この胃を煮てあらへなぐ本復あるべしといふについ
てぶこの胃をもとめたくおまを能煮て母にすゝめ
よとて其妻にわたしてそのへよ常々おとのおり不
孝なりけまは却病のるゆなきはせんなさくすりぞ
ひなりと思ひきるおかしそのまゝごよめ子をうこゝれは
其胎衣をひろうにとりてよく煮てゝ姑にすゝめ姑
この胃をばかくしてなのれか菜くひあぐしたりけ
狂なく赤いろなる蛇かけつまの口へとび入けるを尾
又すなとは口よりかにのこれはこゝつまなれたけば

もぶえぬるまいつはりあしゐことに希代ふしぎなる
ことなるまは安倍ほ君拘の人おかくあつまりけるゝ老
ゝる人のゝ君ると見れる蛇の尾うごうしわり見れものゝ君る所
れ尾をひぶりみぎ上下へうごうし面をたゝきけるこゝろ
おそろしけまゝ或人くざぬ見をもて蛇の尾をもさこひ
きいざさんとしけまとも尾乃かゝ見まくろがひぬしとく
りてはくへれ入といへともかもくちへいでさりかゝ
乃ことくなやむる三日ありて終よむあしく後よける
はひくの不孝ゝかそのつゝ乃がれかゝ見ま紫ぐひと
せんなる見ことに思ひ胞衣ほ入りへぬるゝ畢竟姑也
あろさんとたくむかゝ見とし見悪逆なるまは天罰ぬ也

ミやりなるゝもちろんあり姑君口へ入ましき為ゝ孫
の胎衣とすくむるのこなりしが己が口へくすまじき嫁ゝの
胃をぬすこくひける悪逆母ゝつゝ人の口へもいるま
しき蛇の飛入けるまゝことに新乃形ほ出ゝ
とくなるむくひたそろしとも中こいつまあまりあり
まりきこのゝ君る所ゝ蛇乃尾のうごこ見ぬるゝ孝を教
面不孝といまゝむるゝ分明なるまは天地神明のし
めしあふ不をこすく恐ゝして人ゝの孝ゝを明かにせん
ことこそ乃さいひなるへし
姜詩が妻乃龐氏姑ゝしはうへくきゝめくく孝ゝしなる
姑ゝ口ほ江水をもとくのめり江水ハ姜詩が妻まりハ

一四五あまり程ありけまはそもやまくくらんらけまと云
姑江名にあらされたのむましなりけるゆへに麗氏
毎日江水をくこくすゝめぬある時風もけしくして
海なるをそうりけまは姑まちうへくたれいざいうわ
くり夫乃姜詩も本より孝行あるものなまは母のこと
やまめんさもめふこそ妻は麗氏とおひ御くりしられとも
麗氏をまう親のもかへもうへしほどちうれ下に高をかい
まよりの畫とれくうこつむぎのいとなこをとけこ姑を
くまうなものとこゝのへこそ隣乃うだを軽こて姑の方
へをくりけるう程久しくこぞもえもなりけまは姑
面しく思ひ是を誰人の給ひくそと覚けまは嫌しう

とありけまくにかくろしうとめこそ孝行の誠を感じ且は
有がゝ記志はつしく思ひ姜詩にまひくよひうへし
くり是より麗氏乃孝行いやましにまめやうなりきれ
姑もよろこひ思ひ家まづしけまこともゆゝうに日をそと
くりけるか年へて一子とまうく屋うく人となりぬ
まは麗氏にかりて江名をくこけるかあるか時水にお
ほまさくむかしくなりぬ麗氏姑のなげうんましを
おうれてなどまこれかくへ学問ふはうりしけるといひ
しかくしくり姑清ひに鯰をぬこけるが記とりくふ
をいとひうれらは隣乃媼とよびこまにくひぬまは一へ
こゝのひかくゝあましかとも夫婦する量りせずて絶

ぜ鑑をすくめけるかくあがこれ孝り年へてく久しき
まばあれうしろは泉まれあつりこゝあぢはひ江水よりも
もまさりけど姑乃ゝよくかるひきれば出れより江水と
汲ゆるをやめくは泉とぞすくめけるか毎朝この泉
のうちに鯉二つつゝあけまは是をとりてゝなまれとな
し常にまゝめくりかくきゝいふしぎなる異應ある
ほどの孝行なまはこゝ名天下にかくまなりけるこゝ
しろ天下こゝぞれを新か赤眉といへる悪人同類数千
人を引率して姜詩か里を通りしに畢にいへ孝り
なる人あり盤妨狼籍をせば神明のとがめおそろし
といひくかくて盤妨を禁制しあまりさへ帛米

かと伐姜詩にあたへてとゝりけるそのゝち帝より姜
詩をめしあひて郎中の爵をしりぼりめてゝ
ゝ久けり

姜詩か子祖母のゝめに母よりけく江水をくこしか
何乃難もあるまゝしきゝなるに母におほまて完
しくなりぬるは元來姜詩かいゝきゝめゝく薄福
なるゆへなりしられた姜詩夫婦乃孝すくれてま
めやかなるゆへに殘りし薄福を轉して厚福となせり
姜詩夫婦の孝りこゝ奇特ゆつあり大かこの人は其妻
ゆゝとに咎ありて父母よろこひまとといへどもさらゝ
あらはしきなるに姜詩は法のく孝り無して神なる記

に姑性ゆんじゅくていりゆめるとそのまゝにしりぬるまゝ
情識にしたゝかなる小孝なりといへども毛頭つまにおな
なく凡情のけがまなさ孝心そのきどく一つなり親
まゝ折檻道なれにさへうしむるゝ凡夫のならひなれ
に熊氏はこなくしらまゝぬれた親のまゝへもかへられい
よく孝りをさけましたるも姑をうらこさる孝心
そ奇特二なりなるを覚するなんかれにしたく孝心乃
おころかなるまゝのつゝ此人乃ならひなりしるなれ姜詩
夫婦は母のこころ此やすりしんことを思ふ孝心真切な
新にしたくそれおぼまそむかしく此ぬるそれ江所を
こゝめるゆへなりなと思ふ凡情乃雨にひなれのこ

なるにそのなりしこいろまぶにあらはれさる孝行そのきど
くこゝりなりはれをとくこ鐫をそなるそれよのつゝ乃屋
しるひといひなりしあまろしくいと雨なれ身みなく
愉怠なくさくのへすゝめけな孝りそのきどくこゝりも
この宮乃孝りのきどくとゝもて鼻まれ鯉のこそ
さは奇特のさいはひをまゝひくのこなしに西人を感動
し終に萬乗乃君にまゝかんしそまろり帝中を
宮にのぞりぬるを雖さむくひをうくなものなり
一周氏いとけなりしより孝心ふるまゝりおとなし
くなりて戚生にとつぎしらそれ孝心とうしかはに姑の
こゝ夫人にしたゝへく孝りくてひなりなり高夫人さハ

めくさはけくさんげしき人なりけるまはいづまのあもんに
かなふものなし志れとも周氏を孝行謙あるなりし
高夫人乃ふりしかなひ何るなりは清貌さくも周氏はかり
とはしつかれかり第周氏爲ゆるなれは高夫人のきぐん
あしく家内のものをあてはあせとあぎりなんぎに思ひて
周氏の誦るをそまちかのまる高夫人のきげんあしくて
食抱乃すゝまのさ御所を周氏こづから調へてくすゝめぬ
まはかなしげきぐんやいきいつまてもはしとこさる
またなし高夫人老後は痺風といへる重き病ひと
うけてく男もかなはさりけるを周氏常はそれをとなれを
常ともとりで赤子をそぐるなりなとあんせけはあけかひ

しかはん常しき高夫人もこも存りを悦びて病苦とも
ますまさくおはりはかりこれは夫の戚生男ありけるを
男子四人女子一人いづまもいまこいとけなくしてすれは
ひのいとなこもなりがこうりけまは周氏よるひるとな
もかせざ衣食乃つこなれは男をやつし女人の子を娘
しごくこて男子は皆学問とつとめさせけり周氏本
より孝心あさしかなりけまは女ましはともおろそかに
はしつかはをなさけかしこれ上舅姑夫の忌日まことは
冥府乃祭祀は其謙と盡し病中といへ共かなしは
こうしこてのへてまろりぬそのうしまやう乃如圭次乃
子皆学問成抱して兄は進士よのがり弟は郷薦にて

しれなり

孝行といふは舅姑にしたがひ
貪瞋癡の三どくとのそきすて慈悲柔和のこと
眼にしたがひ苦とせるりまにたがへ奴になるけれども
ぎいひのせきとはとめかりうめゆをいつかりといはば
今日としてうさるにいたるまでも皆孝行なり
存生の舅姑にはしたがふ事よりも死せる舅姑とまつ
ゆまたるとしとはくをと孝行の誅とはしたがひ
周氏生るにははへくそのこゝろこひと得死せる後
もつゆゑその面こと絶つくし寡となりて苦とせ
里生業とはけしまにとしへ奴をいつくしと孝行乃

乃かくゆゑことなるまゝハ希代の賢女なりかるゆゑに
絶に二子の才濫官位乃さいはひと作りおしてめて
さしくはへくうる夫人のごとく心にけさも周氏ハ
孝にのさやいしれぬまでも云る夫人なりとたまかしける
姑にしたがひ西きぬるのを皆にめ此ゆゑ孝のいたれ処なるを
鄭邑乃百姓支祖宣りつまの喩氏いとけるれより堯
敬廉直ありしく女事のせれもすくきそなしの二十
あまりにて支祖宣の家へとつぎぬこゝ姑黄氏八十計
なりけるの目もくらしてしたくれはめてせいしなく
きまいぞれにて此へくてまりしとをよりおく敬
まん濫あるき喩氏なりられハ孝行の誅を兼し黄氏

のよろこびをもなりあるに夫乃支祖宜酔狂して人
乃歯をこ投うちもぞさくうれ侍くのひよかひをあし
けるが故まつしくて調ひかひまきは喩氏の母逆
具をしろうへきあしけが喩氏をこしもおしこくやむを
しきもなくそこ夫乃つこれゆるされしるをとろこひ
なり喩氏とし二十五乃夏のころあるを夜神明まくら
ぐこに立て侍けなへるを汝の生まてハ年宮といふ
ものゝつきあるをしか三十九年病ひをうけ逆をまえ
てなもこけるに汝が姑七十あまりまてもづから粥をお
くさいくしいくすゝめけるをうれ思ひ乃かしと
は思ひして汝が口よりく食を惡むによろくくなる

ことをのつゝなることとあやしく思ひしかどもあを
からよとひ明らむへきまゝあるぶれハそくいうされハ
石掘よをいへかぞとをうりなり喩氏ハ里にかり父母
かもいとゆこしてくいそれ夫乃姑に喩り家乃面の大
木の下にゆさかよむうひ事をこれ天に恨ざくまをな
そいかなしとうれ雷死しやくごうれむくひなれしまと
のかるへきにあらんしうれともなげかしく存するを三
つあり夫乃姑をすづしく姑とし老ぬまは孫力むかしく
なりなれ詞乃ひなりかくうるへきなり一つのなけき
なりまきいとけなりまし父母乃をしへさぶうなり
しに今天罰まて雷火にやきころされなし父母の恥と

さらさんなるそのなけき二つなり今まゝ身をまゝにあらす
してまさくに七月よなりぬこの子男なるを支氏
の子孫ろうぞくまべきに胎内にてともにむなしく
ことそのなけきこゝろなりおのこゝろ乃なけきハのゝるへ来
たるけきハいのりもとむるよおよだけり今二月の表
のへ給ひなは身二つよ此支氏乃子孫そうそくまへし
百日乃命と給ひけんなるハかゝれなるとなる御じきさう
やきのこゝひはがふとこゝろなりと精誠よいのり寄る
時は大暑乃こゝろなるしに偽よ天の紀くなり風もけ
しを雷すき御しくとゞ詠きけまは喩氏ハいのり
をかれいぬかに楚と思ひいまやくとゝちゐたりけり

なり食をくはざるよはあらじ理不盡なることなりなどの
志わ泣うしこめることをすひくなり東鶴よおもんなく
姑なり射し天に伝ぎ年七十此人は死をびして三十の
ほうりなるまれとさ紀をすてをつるハいんぞや天道を
ろくなしざ御よしそとなけきちをひそりこを家乃
司命こまと天帝へ奏せしめあるしは雷公よみことのか
して御と屋さころさるへきに定りけまをしめしてぐよ
むなしく如くその責おこなられをその按牘いまに
天曹よあり凡善悪のむくひは一世代かさりとは一世
は二十年なり汝おの生不存ましてむなしくなりし
年しかり今すでに三十年よあらりぬまは宿悪の張

明日わかく明日雷ありやきまろまるべし汝今の生れ
て孝行なるにはかりさくおかとに告しらす孰なりとの
ひ愛ゆさめよかり愛なからいらぶしき神の告なれ
喩氏はめさくの躰しくおもひかれこものうなへきたなね
だと思ひきり風におさゆあこ髮あらひ衣裳あらし
きにしてもめさく姑乃まへにひざまづきいひかるかりそめ
よまかんしなりさくよりすすてに三年に成ぬまたはして
はんとなくさむるまもなくおゆなこまりよしそ物ひ
得ま父母にすすこし男のうすありて墨にかりぬ老少不
定乃世なんなしひなまばもしやまかんしてまろしぬ
しともしそのこ所んといと面こしてそ家にけな姑ふその

その墨乃張氏がもとへおちさく其はまの馬氏を面手
ろして天にれにしかは喩氏を雖なくのがれにかす
ちはまさ神明樹がこにしてはて汝が孝心乃すぐれ
なるさ精誠乃いのりを梓潼帝君きこしめしすまひて
天曹へいたりて喩氏が宮業乃むくひのかれかたしといへ
らと今は孝行の誠あるよりて今日未得に脱ていのり
しこしろんもあとをもおもやけにして孝行義姑
くそのことはりにしけまは禍を獲し福をあるへのふ
きなりなりし墨は張氏がはまの馬氏ふけ
淫乱にしこく姑し孝行ならば夫とは奴のごとく
あるどりの詠しめぬ此馬氏を喩氏がかたりに面さ

こゝろさせのひなるを稱善禍淫乃理り人乃不明なるゝ
しと奏聞ありまれは天帝こそ誠にしたゞひ給ひて
雷公に勅ありして汝ハかゝりに弓氏をやきこゝろし汝を
まつけのゝなり今よりのちいよく孝行をこゝけしへ
しとはふさに告のひけるこそ有ゝこけまし
世の常乃姑にさへかくまゝ御ゝは常のなゝひたる
よきにめくゝしけさ黄氏の悦びを始るゝその孝
行なりあるゆへたまも一稜乃黒ともあまものと思へる
心あるはほひ乃女の情なりしかるに喩氏ハその乃
異を夫乃醉狂の後くのひようしなひておしこゝ
やむんれきハ夫婦一体とおもへ乃此濫明にして欲

心乃けうまなきこと男子なりしも有ゝこき濫行
なり宿悪の内にてかゝくゝ天よいのりぬるんといひことを
といひ義理正しく孝行義節しく生死乃濫にハ
なる紀心君子無ゝ恐ぎる事なりかくまぐれて奇特
なる孝行の濫あるなれは宿悪乃むくひをまぬかる
なのこなりに孝感の稱めぐさしくしかへなり
喩氏は宿悪ありといへども孝行によつてその報を
まぬかれ弓氏ハ宿悪なしといへども不孝によりて
喩氏にかゝり雷火乃せめをうけぬこれまて孝行乃
功濫不孝のつことをよくかんがへしかへし
犯世の果をかんがへ過去未来をしるといへこれ孝行なる

功徳まで宿悪ごに変しぬまいまして後世善
のくらくいたしてあれらうるれは成佛得脱乃
ゆきあるものまそのつとむる事をしるべし
善悪乃むくひ大事やくこ二十年をかぎりとあま
もあしかれ善をなして夕ゆりむくひとまへあや
まりとよくまれまへさまなりいかんや又そのあ
代にしむくはずして子孫にむくへなをまとや
喩氏もし雷火にしやうまいく宿悪あるしるを
しるしは孝行乃人なきたかく呉にしあるなとく
福善のうさかひとれがこかるへしされは世間善
なして呉に何へ人千人に一人もあらんは宿悪

むくはなりくその善いまだこれくのつまそうざれ
少人に喩氏がことくまぬかれさるかなるへしよく
よくまきまふべし
右孝逆乃報されるまやかしてきこくき
どくなることは代えらひくしるしぬ迷ふうきへとら
びさあさんそもめなり世の法のれむくゆる擬とする
べく家ことにおほまれとも孝逆のむくひなるま
をまれまへをそしくその生れつきの福なりなと
とのこゝろ切ぬるものあさ海しきことなり
福善禍淫乃善は孝行をもて本とんかるかゆへ
に孝行の体ある人福ひを得るためしかぞかるに

いと海あらはしたる海と記れる父母舅姑を人々家と
乃福祚なり又梵網經曰孝順至道之法といふ事
あまたは孝行を成佛得脱の真実乃法門なるましを
明せり弥勒佛勸孝の文に曰現世の爹娘便是釈
迦弥勒若能供養得他何用別作功徳といへりこまは
現世乃父母はまれつら生身の釈迦弥勒なまは父母
に孝行の誠を尽くしめまは別のくどくをなまに
おまはしといふ理りを明をりかくおとゝなれは家こと
人々の父母舅姑は皆阿耆薩なりされは父母舅姑を
敬ふ福祚なりと思ひ或は仏耆薩なりとおもひ
かけて不孝の[illegible]にあまりしけまれしことなりを

まれまへさるなりし舅姑をありて益なく却て
むつかしかるさ海しけまたなるおなりと心得るにて
いとひきらしこそ乃此のまゝにしは一念不孝乃相
と說て名々の枝葉志けるも終にはなさましき稱を法
里おせりに孝を王法二千第一の法となるまは冥律
もまさかくおとしかくらゆへに孝の人は或は人の
乃刑罰をかしつり或は雷火乃せめにあつりそれ父
母を福祚佛菩薩なまは現世安穏後生善所
乃ちなりかこなりと心得るもむつしと思ひきらしこ
そのつゝしきえく孝心かさわなくなりしは家へし
第不孝乃念おこ海時にこそ第一此つゝ陽間張

同れせめのかれがたしと思ひこれなほ人ことに見れ
孝行の徳ありてめてたき世界なるなるべし

守節背夫報

ちる苦しみせつを満りまとよむ女乃心いさぎよう正しし
して情欲乃満よひなくろ此夫一人を主の世におもひ
餓れ夫をおひ志てはだとひ夫死して寡なるも嫁
こゝひ餓れ夫りまかんし更ひらざるを守苦といふ背
夫のまよそむゝとよめわちる苦乃こしあわそのまをこ
ゆれどわかろしめ然の夫を意志てひて淫乱なるを背
夫といふる意ハ苦しみ孝行の一端天理の当然なきハ
かなりしこ今生後生めてこきむくひあり背夫の不孝の
一しみ如して天理よそむゝゆへよと生後生あさまり

きむくひあわしられたこのことわりをふ故さる人世にまれ
なきまれそのむくひ乃をこやりまして きこよ記ふあし
と一つ二つあげ〻〻勸戒乃かゞ尺りうるへぬ一つを名
て考とかんかんことよむ人乃さいひなるへし
人の人まゝるなるのも此者その家へころぎし始よりなら
しちる義乃ふあわゞ夫よそむかんとは露も思ふべからん
しられた或ハ夫のなさけ〻ふ故よよつく恨こをふく
或ハその夫乃容儀ふさまなるのむげにおとまるを
あなどわかろ〻め或ハその夫乃家此まつしきをこさひ
或ハそれ夫乃族性のいやしきをいとひなどする一念
なる者夫乃報となりその上に或ハ其男此多にさ

しまれ或ハ情歌乃取るかたなる記に流よひ或ハ乃れき
男のいさなひに記りまゝく殘に宵夫乃淫乱におほまゝ尺
くなりしきふさまなるのおこなひあるによつて世間此ふ記
名をなりしのこなりし天罰乃むくひあさましきをの也
さまさしかくれこと記の人も殘にその名乃ゝち天罰其
ゆゝる人きるをとくわさまへなるん真悪念をこゝしなる
さ流しき道にはおち入ましけまた他人乃尺をきりさ
なさしろなまハ志なる人もなるあしとふ始ぬまハ流して
其乃神明の照覚ハ思ひもよらすしていましむるこゝろ
あさくねがふふいやましにかなわそ流ぬに流よひおける
なるへし世にしよりこれをこゝろ乃にかさりて人志まぬ

ところ乃まゝじゆりなまた実ありてくう紀名れたゝ法ゑ
ゑなし是ひとへに神明の照覧ゑ屋ゝ乃来も宣れこ
とくなれば神罰ゑよつて其名ゑつまのなりし理り
を能ゝえゝく背まの念おこる所ゑ神明の照覧れ
うろしくう紀名れたちあさ海しきむくひよあゝのこ
なしれう此親兄弟まて乃まちをしらさんるをしく
つく思ひこゝして楚の急をのそ紀まつへし極文夫芸
なさけ乃うすきまゝ乃容儀ゑさまゝ乃をとゝまるゝもま
乃泉のまつしれをまの族姓乃いやしきも皆まう男に生
まつさゝる果報なりと思ひかへし考りしる学の議を
はくしなゞ子孫繁昌めてゝかるへきるをひとへに思ひ

なくしてゝ霧もうしこいとふんをおこすへかしれ
太守湛のむとめ房氏幼少乃時よりはたらなるみきゑ
おけゝる十六歳く魏溥ゑ妻となりぬそゝ父九ゑ妹ゑ
冨貴なるゑをわとれ姑りしゑをとくしまよいよく
茂をちまわ年へて男子をまうけしがいまゝ百日ゑ
ゑくさるにまの魏溥をりさ病をうけてゝすりかゝ
く見ゝ々まれ房氏に語ていひくるゑ人の生死は天
命乃さゝまゝるこゝろなまれ今まれ男海りるんハ霧
もうしこなしそゝなけしきゑ海年わりけまは寡
まてくらさんまゝかゝりなへしさあらハとしよりゝる母
いとけなさゑとり子誰をごくむかゝをあるへきしれ

気のこ除後乃きわりさもあるへしとこそおほゆまとおさくと見きまは房氏なくくいひくるまさう男ちくもゝ此命をうけさくまんよまんこそまろりけまハ此もに老なんとこそ契ましに今君不幸ましてまくまれしく成のふハわう男乃ふ幸にくこそ侍れさとひ家男記とつなりともまゝ誰人ありまかんえんや御し高大夫人とおきれきものとあまきハわう男まうけまバとて気をみすてゝ身此さいハひともとめんまお畜生よもおとるへし左様なり思ひ出まのふこそ情なくふひ侍れとてなれうしこゝろり魏清ゝ病源弟になりけく後ありむなしくなりぬ房氏まことになれ

れしひしがう此尸を棺よおさむる間こゝろ右乃耳とさりけく稜のうちへなげ入かゝくの契りまうはして後の生まてあひまかんえんまさくれかゝかんなりといひあうちつ奪をおしまれなさまうまゝり姑気をみくきも後ゝかくうなしきゆよいうなれハくすゝまじきこと後だ志のふやらんとあやしこけまハ房氏あさへくまれゞしわく侍まハ父母乃家志をうたひ後ハ今をおもひはかりく気をもてまうに根をあらへしこゝろちゝいりなりとうかりまるさて葬礼なのとくいとあこ喪に居くかれしひのまことをつゝ姑ましいよく孝りをこゝろにまゝ子をよくまこゝ

そこそぬ一生れうち絶に音楽をきかん酒宴の座敷へ
出しいらむ法のようちにのこれ子の緝人となりて
うし十二の時房氏の父母いまこ法にかなりけれは子を
おきてく里へ入まひにかへりきかの打つし房氏乃る紀
わまて房氏をおさへて敷へ強きすして法るかゝへ帰が
三あんと父母一門談合あけるを子の緝をつけて母を
房氏より知うかにかくりきれは房氏いそ紀かくれて敷
にかへりぬ所にありて父母房氏を尋ねはかつりてなし
おとろきおひかけぬ事を絶にかへらせ男おかるまて芸
となり姑によくしたへける梅子にをしゆるに道あり
けれはその子才徳をくれそのかゝれなくて法門へ

口いこされ濟陰乃太守となりめてこくしたへけり
寡乃子まて聖ごそ言るものを大かこ才徳不肖か
なものなり読女も気質かして不肖なるをは絵
家そこらなといひやとしめりしるなに魏緝は敷
そこら女して才徳をくれなまれまてく貧賤乃
中より太守の位にのがりぬるを希代乃福ひ也
あれひとへに房氏にまさしいの徳りあるゆへなり
慈悲清浄の心と儒家にも仁徳と名つき佛法に付
佛性と号せ房氏その吏を聖して芸をもり姑
にしきりと無しその子を聖するに道あるへこれ
慈悲心乃明かなる有なりとも男此かこをなるな

とりしめ身乃きすつきいくむそのとかりかんを一生
楽事にあづからんを尽し力役労すべき事皆
まのくめ而して欲心のけがまを露もなきれハ是清
浄の本然なり此意思清浄乃仁徳佛性ハ百福
の根本なまはうれるの才徳官位の福を所くり
出せり現世のむくひかくれとくなまハ冥福も又
をしてくしるべし
鄭氏が妻の陸氏答候ことにしてくれられし吏婦を
あひさきいめてくむつまし如りかりある所鄭氏ちく然
ことにいひそるをまれ家不幸而して男ありなるん
汝かなしん女子よまかんゆんまゝなられ家ありにちき

まちなしこまもりなしすが能のつまをかさひまりしとかくりを
まは陸氏おくへて百年までもともに老なんとこそ如し
中なるにこハいまりしきすのとのまゝのうれといひなり
てそありそるまゝのち年月をへて鄭氏病乃床よりし
くなやこけるうこつから本復あるまりしきすを見てける
よや父母のおりしまれ所陸氏よむりひていつぞやのちく
めるまゝまを偽くるよや今まるまゝやなさなれものをあまへ
いよくあらしまめとりくましなられといひそれハ陸氏を
就うらあかめかうべをうなられそくかなしひなきそなふ
さもものとはいはりそり鄭氏が病ひ日よそひおりり
て終ましまなしくなりよそりほどへて陸氏ハ鄭氏

か言葉にそむきまし乃家督を持て曾氏が妻へあらしこ
ぬ事ぬあるべきまの為に氏為なりし日夕善に陸氏
をいたりたけるが幻のごとくなり獨の男乃文を持
きたりて妻にすゝめしかとかんしし男ハ見けるやう
よせてく文はかりそ有けるなそてかんきハ若此夫の鄭氏
の自筆にて我かたへの妻つさなり陸氏にも心なるべし
らなくこまとかんきはその辞に曰十年比翼乃契里
とひきと記し夫婦なきこれ一生まれをまつるなきこれ
こと上我が財寶こしきにあらしこ何の祿かひたるに
こゝろありてくかこなしなるとてくまに舅姑をかへりし
をあまりさへ家田地かとくをめをとして帰ぬる事

人の母にあらしこ人乃よめにあらず人ハ妻にあらしこ人
非人乃心ゆいつに云葉なりしこれをてに上帝へうつた
ますてまつりぬまきは居りて遊府へすびこゝろくたちをあ
るへいきことをりを散ずへしとあさ居りにかきくとこれかり
陸氏こまをとりこて氣もこさえむひ○つさりたちおそく
なふたへかたく遍身よりあせをなりしそりしかとなく
同まのひとくむなしくなりにけり
人の妻たるものハ此男皆夫乃男にして己か男に
あらさまは己か男のこ婦てひ帰くたそのつこ乃
れかたるへしいりんや陸氏を夫の財寶田地まで
ぬすこて帰ぬまこれ鄭氏か祖へ天帝此ゆるし

給ふ事もちろんのみなり陸氏歯府ゆくの世界
をしこんらまでゝ衣なり陸氏まへの吏乃みをひら
きかゝる時まへ接悔身に所まるべしとしかくのこ
とく死人に非実わりくことゝかめあらんみをわき
まへなれ陸氏も苦を守り身をまろくさしまへさに
迷ひてあるべしきむくひにあへりは故事をかゝ見
て死人に実なしなと思へ事なしよひとひらきこそ苦
をなかたしけとなすべし

むかし梁乃国にわかりして寡なり女あり其の宮殿
世にしくれ今まは国中乃位ある人に我もくとな
りたらをしらめとしまくねらひ今まは殊にまさし

いまさりけり國王すくまさそ親異人なるみをきう
めしおまへせおひて肉裡へまいりてゝ家つかへ今と
勅使をさすておひけなかれ寡勅使に對してゆあるへ
一ふひ帰てよりのちへことひまむなしくあるといへ其
他の事にまかんしさるは婦人のまゝ思る苦義なり此
節義者人乃人さるところの道理にして命の根なり
もし此苦にそむきなしたとひなりしへ詩る其死せな
よひとしきるみなり言られとも今國王乃みことのわすてに
くらりぬまして我ちるかをとぐつきるみせるんといひて
鑑ととり刀をもちてその鼻をそひきゝかしをるへいま
なれ宮をつかまつりしく侍まれおされきものゝよう

とこしろなりもんことは不便りかなしきれんかくハつまま
里ゆなり國王のまきをめすハ名あるなり今すでに
鼻なれかたハものとなりぬまはめされてもせんなりるへ
しとてうちつきてそふしまけなちよくしうへ何て
しかくと奏聞きれハ國王もろ此菩義を感じおれ
しめしてこそ男此まうにゆるしましのこなりしこ
といふ号をくふされてこそ得まれをあらはしまひかり
凡夫乃情まてこれしこれもし菩義をまげて
宮女となりなれバ大かたならぬ菜花なるべきに此
きさる菩を守り鼻をそ此なるなとおり平
まのつね乃海よひなまきはめてんのくらきゆくなり

それ人乃生樂なる男やすくふるし姉よきなれ
里玄女乃菜花といふへきなるハ只いつくしき衣裳を至
りさり味ひいみしき食抱をくふのこなりこまハ乃ふる
こころ乃ふよ此のこ所して此して樂とするにこら
をいかんとなまきたいやしき衣食も老よきなれ
食なれぬまハ鬘乃暖よ口乃やまんするこ
かりなしきれハ高行のいやしき衣食も馴ふ
ましなまハくるしひとするふまとられハ玄女を
衣食を菜花と思ふへからすさあまハ菩をこしなし
しのいよおめてやすらしなけしきくるしひの
よくよなまぬ宮中此人まひをせんと思ふくるし此をさ

しそへたまふはぬるをとしあらはんはんもくるしく身
もやすうるへからすかくのことくわきまへ見まハ凡夫乃
苦楽まてもそなりの苦をちまてるハかしこさ分別
なるへしのたんや苦をうしなふ時は今生後生あさ
しきむくひあるをや國王の淫乱なるもそ行の苦
義をは感ずるこころあまたも誰人もこれ意行の
こころなれはあらはそまく欲心はおほはまて時なる
さるなるかへしよくかゝりかつりわく 守節乃こころ
をあさらむへきましなり
太宗の時さる官人蜀乃國へ勅使はゆられそもまし蜀を
よろ此妻だちられ産ぬりしあくし道行人をなるめ

若しりけるに打つ 張氏といへる人そのまへをこそ
過ぬるの妻まとのうちより張氏を見くその義男なる
ましを目めたやきくり張氏こまをゆてあやしく思
ひなるう一町あまりなどもしきしらんのこりこりけ
まや又六編り伴乃まとのまへをまいくまいしけまハま
とのかより今のかんさしを一つなけあしぬいよ あや
しく思ひくこやすらひまる所ようちより女一人
はしまへて張氏を聞ひきて知ろうにかけるハしまと
乃内におはしまはハなるかしこの内まてわこしせ
なきひはり屋の蜀へ使りしゆさのひくへしきは面ち
まてたびしくおりしめすおりし只しことをこせのつる

と一目ゆくさまのひしより事へかたく思ひ入れ給ひいつく
の日崇夏寺へ来給し給ひんまゝ君もかゝるにのちの
ゆきかゝ給ひへしとおもやきにかゝり浜氏も否いはにゐ
うらうなつきて論わぬそのうち紛来乃日になりて加乃
ちへゆき思ひのまゝに契りをこめ比翼連理れかたらひ
とかしおもまりそひくれ書かきく来と云あり給
ほとへてこそまかりて件のるを作さにきゝしかとも
志らさる所にもてかし日をへて後その妻に頼きるハ
蜀への道すから難所おほかりなまことあやうきまし乃
あまし此百人の僧を供養せんとの願を立ぬるまゝ
明る崇夏寺におもてくやうをとくへしと思ふ迄汝名

なかりゆきそそまんなの比丘尼にし候合してその用意
をなすへしといひ給れハ妻うましきるに思ひ起そ
こゝろ僧をとていそれかの寺よりきうる浜氏にひそ
よ此事を告志せ給ひはいそき来りあひぬまさ例
のことくに契りなのめならさる前へまもくやうなるさ
ならひ二三人あひぐらし来て浜氏と妻とハひとつま
くらにさりしろしまかなくちしさる老尼一人も
ぬらを皆さりこゝろし極なりしかへゆきて志らくゆ
いひあけ給るをなりこゝろより帝へ奏ゆきされ
まは太宗給らまけるをかくれとくの悪人を風俗
とやがて天下第一乃くせものなるまハ是をこゝろして何

のことゆりあらんとてうへにて襃義しまひ給ひ
ことをきくへ皆きこよしといはさるものはなりけり
幸母こゝ淫乱をなしてちゝおもくころされけることを書
物なるむくひなれ此書をかくあらはまんこ
と我かひこゝ心姫なるかくあさましき心行もあるへ
かしを又張氏もむくひ乃理りを明めなれ淫婦の
いさまひにはうさるましけまとも善惡乃むくひ顔
の形にしたがふことくなれ何程隠密なるつも必
あらはるゝおとゆりをたゞひにわきまへさるゆへにその
身乃ぐるしき害に遭のこなるべし父母兄弟の面をも
けがしめるゝなりけまそしもあまりあくまましなる

張氏乃素計夫人をその心行正しく聖人乃法をそるべ
守りけり年二十五にて夫乃張氏にはなまれはその
父母にあらさまめこうがしめんとはかりけまたちひをこ
てゝ父もいまにこそ苦を堅く守りけれ子乃張浚を
養育して身務うまそ操かたりけり張浚やう
くものをいふ所にも成ぬまはれはら父の後まつ又
とよましめよく物乃わりちをまさまへめる所になり
ぬまは此のよろ此父の言行をかたりきるせしけるくを
をしへを怠なる所なし故にし張浚いとけなき所を
里外義正しくんとてするかなりけりすてにぐんふ
をして国学へ学問に入ある所計夫人てづから戒

の文をかけるに張浚にさつけていはまくるを今は家
をいひしたりといへども汝一人を称して興隆せんと称ふ
処なり汝よくこれ程なんぢが祖父汝が父乃法則を思ひ亦
敬いまのしめとまもすまもしまして学問油断あるべからずといと
こまやかにかけまされける是によりて張浚学問愉怠
なく才徳成就して高官にのぼりぬ張浚位をもかく如
て後母を母れ心にすこしかはさるものあまたいろを変
じて戒をしめされけるにも附乃宰相秦檜といふ人をして
まさくかぶきしき人にして善人君子をうこなひ天下穏ひ
とほとこし法門の位をあやうふしけまは張浚なけし
くまもひ秦檜がかくこましれまを文にかきて帝へ

しまつらんと思ひしかは秦弦が勢ひ強よけまは勿ち罪
をかうしつるへしあらん母のなげきとなるへきと思ひ
まつらひ日夜にはぶ事を案しまきは次第にやせおとえ
ゆくそ見えしにける母この体をみたくあやしことはまきれ
ん張浚あり乃まくあぞかくりける母を何たこそ入ぶし
て無くその父ぞん對策の語に所謂臣寧言而死於斧
鉞不恐不言以負階下といつる言葉をとなへらまされ
ば張浚さて其母も同心にしそ今は思ひ出まきなし
とて秦弦がもとを法ぶきにしるし法門へそまつりを
きれ案にたがはれ秦弦が鍛にようく封別へなかさ
れける其附母張浚を送りくいられるはなんら忠節

ともて禍とかゝるをめくそさましなまにはづり
めとするにそしびいとひくるしふへさことにあらひし
よく心とやすんしてゆくへしとてなけくけしきを
嚴もかんくさわくわそのくち秦桧分滅りぬまは張
浚乃忠言かくれなくしてめしかへさるくのこならは宰
相の位にのをわ魏公に封せらまし孫乃張南軒大儒
となり伯爵に封をられ計夫人を秦國大夫人と
於候乃つまのをくり号とそ給わまな
言をするはその夫と死敬すれ滅あるゆへなり其
夫を大せつに思ふまはそのことをしへ家と興ととなし
す計夫人をは理りとよくはとつて能ならずと言て

治浚に道をなしへる言の大義を篤くせこゝ
ろゆへにその子を宰相になり孫を大儒にて伯爵
の封をうけうれ男は秦に大夫人の号とかゝふり孫
あるくめてこさ大禍とつくりおせるとうまに言とする
まは深に育くこさをめしなまたその子に道をな
しへされし秦吾乃心りにあらば敬りしこそ能ひも
又ふすし計夫人乃くとく守言の大義を行ふに至善
の心行なまとも其能ひも又尊し言をするん人
よくまに記まへて大義をするくせこなへし
漢の武帝の時朱買臣といふ人をこまりさ時ことのなり
日夫しくして朝夕もつぐきりつけまことを尚に讀書

と好こゝまゝづしきるをとくるしまれこつかしゝ彩とこ
ゝらへ市にあるへ代々へ一日の糧ぶかまうけぬまゝはさし
てすきわひのいとなゝこゝかもしゝといまれ書とゝこゝ詞をう
こひゝへうかくと業しくまゝはこゝ妻女しきまゝと
いとひ又ゝ朱買臣かすゝだもひとつとめさるをとゝ詞也
思ひくれて常しくさやうにいさゝかゝ日をとり給はんハ勿
稱なきまゝなりなどゝ志ねていさめくまゝ朱買臣雪
も入ざりくり我時妻朱買臣にいひくるゝかやうに淺
ましき稱にて一期をすこさんことゝ人目も恥しけ
きこゝ衣いとまをとゝまゝはれしとくとさくまゝハ買臣や
うくにいひなくさめ為めけまゝ浩才に口こゝく成

い生地たゝまとゝ志并にくいとまをとおひくれハてゝ皆
ゝにしていと面を制してくりてゝうまゝ程なく成事云人
のかゝへとつきしゆゝかゝ日を送りけるゝ打ゝハ買臣の方
へ食飯などをなくりてくり年程てのち嚴助といへ新
人乃とりもちにゝろゝく買臣會稽乃太守となりしぬれ
時に妻ま姻をよひ、もせて我面しきのさなりにおさ今猶
かりをとしせかるのてとく稱んてゝにはとくこけるその
つまに買臣かめてゝくさりへぬる稱を目にかんきくにより
何さゝあしそこ乃くやしさ今れさらやましさ目にそひ月
にましてむかしさりこてゝ乃てくれてく終にくびきて
ひなしくなりにゝくり

人間の義理をもて命の根とし稱ひの種とし一
生の樂しとすべものなきはまづしくいやしきことは
知るこころにあらすくるしふこころにあらんかりを
めゆも不義無度乃ちはづしき事にして身を
うしなひ禍をまねくなりきは恐きこゝのそこさは
あへさことなりしきは賢臣かへまは貪乏乃恥なる事
を知らしめ歸ばくのたぢたれりこれひなする
しとをまれまへ故に貧賤をもつ事悪心にて不義
を行ひぬきは又貧賤をもつ事悪心にて不義
なけきくひきくうせぬ事ことに善悪のむくひ知
きに悪ずるがごとく妙なりなりしなるへし

二孝婦の年十六歳して陳氏の家にとつぎ嫁しまたもま
うけさりけるうそのまゝ軍役にあたりてゆきぬるに此あらう
時に孝婦にむかつていひけるはまれしと家の嫁いさそ
瑜しんるゆハ不定なり老母を屬しまへき兄弟も別に
なけきは母乃ちのこゝにかゝりなけりしく思ふ事なり我
せしあしくなりてゆへしまは汝にも老母を屬しなひてこひ
なんやとなりこゝにむせひなく志しくと報をまきは孝婦こ
こゝそれは何にもおもひぬ事にそこそしく心易く
おもひめして嫁しちなへとそ給しけるあんにたりけるその
夫軍中にてむかしく歸ゝ嫁しを孝婦は陳氏の存
生の時よりもなくを一入に咕ゝし孝婦の誠とはくし

うこつむきとかせぎそくすぎひとゝなる後よ所ゝこ
め帰ぐんなりけるこ年ハ喪終りぬまハ孝婦の
父母そのわかうしてゐるく又寡なるゆゑとかゝ
わかれひさく能縁ともとめて改めとつゝ志めんとはよ
まけると孝婦せめて大きにいかりなんかゝひて父
母に苦てゐしまるゝ今我まはまかんえて夫とやく死
まこ又まゝ母まに姑後喪ふ事と伐れしとすそようけあ
ひめさゝあをとまゝ所ゝ母めとつゞんハ不義母して不信也
不義ゝ後にして世にそもんを死して安堵するに公
すといひて言せんとしかれハ真父母おとろき恐ま
て孝婦がんかりしまゝせゝかりこれよりいよく孝婦は

つくし姑を書ふまゝ二十八年にしてしうとめハ天年
終りかれハ西地附寶とうまて葬礼をいとれ喪に
居てゝあしひを作くせりしまゝかゝまなりしかハ淮
陽乃太守沽門へ奏せメやされかり沽門なのめなりし勅
感おつてゝまれかち勅仗をもて黄金四十斤なしびり
陳孝婦といふ号をくゞしまゝりかり
うこつむきのせきゆて世をわたるなとハ賤のめな
またその孝婦守節まゝぐれぬまハこゝ名雲乃上に
ひきかゝじけなくも慶貴乃勅仗こゝ門に立ゝ
無り諭におまをかゞかんさゝ為孝婦の上もなく所
もなくあるがこき涯なるゆゑとわさまへこゝる十

蓮真といへる女あるうへとつぎまれたその夫乃心より
なかはしてさられて家にあまりしかその浪兄の祖惠を
以て婚姻と思ひたく毎じくるあまりにさびかきなわ
ぬまたあるは其その姨にかんつけらまぬそのおだ阿さ
ましく思ひて菩提にも祖惠ゆえさけしき異見
といひくまは祖惠殘二万貫とおぼしまひる記てに
とさるしに家しかまくりしてこべとふく軽く
くまは姨殘にあらざされたくかんゆるすのこなしす却
て淫乱乃なりやすきやうに媒をしたりそれハいよ〳〵
まかひ乃なるけふくなりて夫婦のちなこよりも程
むつまかりくりかくして年を積わくれた雷菩提

なかにおちて蓮真をやきなやまぬるを却合三宮
におすびくまた命ハいまた殘たてに三度めにハその
胃りし大文字に屋さしなしありことにまいたく
乱倫怪獣来生不得来死不得三年方令入地獄受
罪といりゆもあざやかにかさつけたりこの淫乃道ハ淫
乱の心りあるいたづらものハあやしきくさものに同しき
きはいさんましとしとむるとも切べからす死をんことを
ねがふとも得へからに三年過ぎく後地獄へおとしてせめ
とうけせしめんとあり其後のおぼしもおとなく大風に
あてらまさく目をくじらまき鼻をそうれてものくるし
くなりきなりわまき錢をとりて乱倫乃怪獣の同類

となるゆへよしせめにあらんなりとなけくれさは云よいひ
やまさりなり
此報ひ希代不思議乃おそろしきことなりこれ
かぐかんて淫乱の心けしさりなりしば地獄乃責をうく
なるをとくくわきまへいましむへしく
○洪武年中に都乃あるなる公人隣乃女房と記そうり
し淫通しけるなりある曉隣乃男用所ありて都へ
おくるをうのまおとこ見をうらひかんをくやそとなりへ思
ひ入かの女房とあひまじりらんとせし対男などなく立
ゆりそまばまおとこハ家をかんつけくるるやと驚き
けるをて庭乃下へまげくれぬ女房男にとひくるに

れ用のありて ゆりまゆるやと男まくへく討の所あり
きひそ乃まるに汝よくねのりこまさを記えて病なるや
せんとおもひ事夜とさせんとて ゆりぬと云て
引けく又おくゆきぬまおとこ庭乃下へそ此事を
ちくくと思ひくるなりの男かなとに妻をこひ
とつに思ひまるになさけなくもまれよしをかよりしぬ
とのゆくさよかく人姫人乃者にちまりをこめんハあさ
しき尚よひなり不経夫と記としき女なまハきけ
こまろへしとしと思ひちそくゆり此下よりおくこし乃
乃をぬきてうの女房をけしこうして家へうりさらぬ所
かくそ居なりけるいまさ淮もかつけさるうちに書

此〇菜うりさくひ乃翁菜を持来りていふに菜をも
のさるまのしやとさへともこゝふるものあし入るゝ乃ん事は
件乃稱なりきまでおどろきれてまてしまおも
きるを人あつまりて此翁をとらへいかゝ面よ此ものやう
きをしるべしといひて なりしかへいて投獄しかり
なりしかすてがうもんしかまは翁くつう乃こんりて
やまこんいつ何にくまがこゝろしかんへるなり科よおこれ
りせかへと白狀しぬされよりつゝ頸をきしるにきい
まりけるとかの男はるすと笑て思ひかるはまきへとこ
ろして又つこなさ者を刑罰よあらせんと科乃上
乃稱まれらいあしと思ひてこつらなり所へゆき

こゝろしかるを詳に白狀して菜うりの翁は罪なさ
こゝをあしかまだなりしかりけるを法ずかに奏
しされかり帝きこしめして此ものの淫乱の罪ありと也へ
乃こゝろをあの女犬畜生よひとしきものなきに数宮
の科乃例よあらすゝ上菜うりの至実をあらす事
その功をすぐひまれなるなきばその罪をゆるしへし
この勅定まて菜うり乃翁ゆるさるゝのこゝろしかの
まゝおとこをゆるされかり
凡夫の情をもて乃るに日ころかよひて情のつけ
きたん触発乃こゝありかく先兆を悔なるべし向後思ひ
さまりかさしてかよいざるまでなくやこぬべきなり

しるかをとき歌だらまち変して数心となり情か
くもこ道をころするハ其ゝ件乃男の心に神明
の入かたせかひて此男れ身をかけて淫乱の罰をなこ
なひかゝなるへしそうして淫乱なる人も此淫なれ
にあらされた淫歌におかれまたく不義をおこなを
此とも感触乃事あきハ良知則ひらくるゝ故
男れとしまかの男此心を淫乱乃まへにうしなひぞ
是をは隣の妻も此害にあらはれ已も恥をしらは
まゝじきに義理の思案に更にさるなかにあさま
しき事をなしぬむかしある者にまたけ二人あり
けるを此る人二人の方へ参ぐちをもとめて無言なと

はかりしまるか一人はかくく言をなりて此事しせ
す一人はこやを　あびきさらは思ひくにかすひ
て情ゆるまかり年色をくのちかれ身かけ乃あかり
むかしくなりて二人だに身れまくになりけるかの
なりたちしたる人かれ男にかはるハ今は思ひあひ
ゝ疾よびとつて思ひ乃まゝに契りあへりしと云れ
れ男れいらくなりたへよひとりんハ祈りて所にあらんい
んとなりきれ我ことく悪ひくへのあらはれ無之まる
なびゝへかれれ粉へさ人にあらず今ハあるしなき
きれおかどなひかさりし人を媒してくべといひ
て今ますてかすひし女とはすてくおかどうけ行ぎ

なお女とよひとつくしつくちきりとこめてくりいま
ぶこりの毒なりまてかんくかるゝ男乃人の妻とこひ
引きそのかんにあらすして淫欲の目のかたらん
まして心くらくに氣乱きたくなりてわざなりかくの
ことの中もあしいさうくこてろえたくもしいさまゝ人
のあらまほしきを悪乃へ引いるゝ悪魔なりそのうへ
れおとこ乃かんにまゝがるびくをゆくこいとゝ淫あり
いまきてりいざるゝ淫欲乃狂乱なきまんそのむ
べからすとよくしくしあんくつくして淫欲と懲
しし義理乃心を明まもべし
閨乃有行答子を欲ふくしたまはまるゝまてま

けりことすなかるゝしまひなひよかけわぬまいまま
見りしとかんけりへぬるまかざりなしそのつま賢徳あり
くまてありとの心切乃せまゞしかしす　そまざしひ
きひかんるゝ残なげしくしく思ひたゝくことなりとつくし
利害とうなへたくいかんしけまたきくもいまさりくり
あるとは答子くるまゝ百姓ともにぐしおひたくしき
ていまくなへくりきるゝ一門乃ものともおあけまゝ
めてくしとよろしひいわひきるゝ答子乃つまへおされ
きものといづきそなゆとなくなさなげきくり姑こま
とかんたくいりくりとめてくきかにいまくしき淫やう
うゝとのくしまきまは婦こくへたく。きるゝ答子

乃閑を治めあ小事無乃まして國おとろへ民恨こゝ後
ふくこゝあまそれその禍乃りまかくゝ思ひ侍りて常ゞく
ひきめりせとも此又を入あれはいよ〳〵よこさ由なり
事のこゝ也もくこゝおしてくゝ金銀財寶とあつめんとの
ひきぶりて後の禍とばあ誤りかへりかへりのみ程なく
答子乃一家こゝかゝろ得さまゝくゝ子孫乃こゝのとたん妻
を思ひ侍ぐけるくかくハなけきひなり御異見まし
御ことあやまちを改めて善かうつりのやうに此家
別あまりしかさもなくひいぐさまゝくまゝ此いとまと
あれり侍まかどよしおきなきものとつまて何ぞ
まゝも此がまて掛ぐ〇よ此ぬしくゝ侍ることうちくとき

て又さめくと聞なり紀よけ家姑いよ〳〵脇をとゝて答子
に告て後にその妻をさりてぐりまゝ妻おきなきさ男子
一人をこひうけ侍まて罪まぞ恐りけるかくて一年をて
後答子が悪逆ことゝくるあしいまくれハ一族に到るま
てこゝ肌一度にころされるくうせぬ姑ばかりそ大老なまゝ
とてゆるさまゝくゝ罪へ恐りくゝ家答子が妻はてをきて
くおさ肌きものをろとりに姑かんかくへゝぶりゆき答子
を無ありし時よりも一入孝り乃誠を尽し答子此
めよこ一年此喪を終りおさ肌きものを取しなひそて
後に答子此家を侍ぐせるくゝ
答子乃その妻乃いさめをきく入なまへめてくゝとも

まちがへなんものといへまゝしきうかあらはれなるかが答
さ妻乃いさめとうけさる有りしこそ男西死よりあふ
のこゝあらはこそ其一門まぞこれかやされぬまゝとも
それ妻乃守義の切よりつゝ一子と全し家とつゞ
むるのこなりしは老母乃孝養まぞこけをるゝ有
がさきそもめしなるゝ爲しこそ妻もし法なくは子孫
のまゝのとゝろのこゝあらはれ老母もするかさなく何
さまゝしがるへしそまゝ貴義といふ者夫まゝ男んとは
寡乃みさかをちゝりのこゝにあらはれ平生其夫の道を
いさめて吾をすゝめなすをちる義が常とは無ど
て女さ同よりのこゝありて亦幸がうとめなるゝまゝは其

夫をすゝめて善をなさしむるをかんやうとはされ
ん古かん君子のおこさてゝ夫に二つ乃善あまゝは妻
ニ一つのむくひを得るまをすゝめて善をなさし
むまゝは夫と同しく其むくひを得るといへり二所
むくひかくれことくるまゝは無の母くひものがゝ人
かしぞよくくこまさまへてその義をちるゝ
華陽乃李尉が妻ハ世にまゝまゝなる英人なりける
をその時は義度使乃官張氏といへる人きゝおよ
てかんまりくねかひぬまゝともその為なけまゝは弓管を
こゝまゝをるゝはくくと思ひおして幸ゝへ下知して
七月十五日に夫くれとうろうをまうけぬ義李尉が妻

ゐん抱は来りもやせんとのたまへそまらけまた
路はかんしざりくりとなりけれ人はいりあまれ李尉かつ
まひとりはかんとぬまやとせまれ宮殿のまぐれ
こまこれ史乃かくく制まるゆへはといふ文法くく思
案してまくこなる細工人をもてひあつめて人形とつ
くりあやたりともて或はこしたりせ或はひは琴をひかせて
人形は笑絵をぞさせける巧をつくして成就せしかれ開
元寺におはすてまをとゐんせけるに三日過ぐ禁中人あく
無しと按語しけまは一日語乃うちれものも考候男
女をもてはまもくとゐん抱の人おびたしく
群集しけまた李氏かつまはいまたゐんしざりし

三日はまんぞる東ゐん抱の人もちりしづまりまる所李
尉か書あまりはゐんたくやはきくんまは思びてのり抱は
のり下女一人法まて記そかに小ゐん抱はそ来りかる者
常形をおれかまは隣まれものいろき張氏は告はわ
かまれ張氏は衣裳を改め抱乃かげまりのそきこる
は笑およびしは一さは滴さりまる弄人なまバ元よ
里意志ふまし日はそひてかくまりまれ李尉がい
思はお入まる比丘尼又はゐんこなどを教えて媒わし
さびくくとつかりしままた李尉が書はげしく
せきて中くしゆもとうさまはせんかたなくてそ
日をとりける朽つし李尉すこし法をおりす事此

あらしを下人所へ出してその罪乃評定あるらしと張氏き
さらけ幸なる事ハ出さるまとよろこひなり而へ
憂くまひなひくらさ拝を乗くなりしはらしく
そこきて領南といふ事へなりしけるか道ふてむなし
なるなりぬ張氏よろこひて李尉が母に金銀を遣ふ
よとしせらしにあらしらへくこそ妻とうれひとりてかれ
李尉が妻もはらしくおのまゝか宮仕にまゝよひ李尉と
ふそくに思ひ出さん志并てふせくこともなく張氏
に娘ひて偕老同穴乃ちぎりこぐひなりかれ出
とも張氏が娘へとつきそまる日よりたえを李尉が形を
かけのかゝらしにあるやうにみくて

おもやかなりさりけるは張氏にかくといへる張氏が
しく思ひて志なしあるが御士とおもひくよひあつ
いろくにはしらひとさせ又ハ祈嗚にきこうしけるを
そのしるしなく一年あまりして終に李尉が昊にとり
こゝろさまゝり
李尉が妻乃その容儀に満ひ夫と不足に思ふ貪
欲愚痴の悪念地獄乃種なりその上にまのつせこゝ
おひりかんぞ知そりかれ死におくるまゝりにつて終に
そのまゝと出死に落しいるのをなりしまのかゝきに
哭ひとこあける事言語道乃悪逆なるまゝ李尉
が昊なりてとりころしぬるなり氣味にもむくひ也

そなは一年もまさりして張氏とも李尉が奥方を
てさきこゝろしてくらはしむ事をかくかんて第一お
ひとをゆくこゝあれどる一念をしらさるべし李尉が
つまの悪逆みなこの一念よりおこまり椒文何事に
はとそしも女乃見物このことをよくいましむへし
〔楊別ある墨のなかりしか書ける男とひそかに通し
て月よそひてやまがひに情かくちぎりあさがらざり
くまはある衆乃むつことに頼まるはいつがいつまで
かくなさのひなんやいかにもしてあるし乃男をむな
しなして思ふまゝにちきしやとやまがひにうちと
きく談合しまくこゝあしてあるが衆男に酒をしき

て思ひつきしめ衆更人しづまりてのちまおとこと二人し
こく男乃なづきに釘をうてこゝろしさて火をかま
やけ死しくる狐にもてあしかり誰うたゝふ人もなかれ
しかも塗たりかしこしとよろこひなかしいよく人
乃うたかひとうけじときはめてかれしきふりを作りや
け死しくる尸にとりつきこゝ思もおしまゝすなさな
まれかり杉ふし楊別乃刺史莊遵といふ人とをりあれ
せられかるかはをんなれなく夢を使てあやしこ思
ひまゝかるれはなくこゝ思ひおそれたりてしはりまて
かれしふてこしはすこしもやすこは何事をなけく者ぞ
為ひ事をとこく彼をそそしまゝかれじしかく乃事

さんと思へ家人も祢明れ照院いりくすべきてぶそる
きまし我まれまへいまし　むへし
安東乃金氏ハ天樹がつまよりきなり法民年中より
吏乃天桂軍役にあらんとしあけるぞ　おだんとする夜
せはりに志きりに人のおとろきよ　あわことの外
にあはすきまし　かわきまれ家内乃ものども皆　頸へと
ちぐめくひまつし　雅おさあんするものをなし　金氏
ゑとりはしまあくこまをとられ虎すぞに吏をとく
ゑへて引きりゆきぬ金氏なしくいきとりて弓
をとつてをめれさゑんくおの法を乃まして
吏にとりつきちのまにて虎をとてきて十弓ばかり

そとゆきけなり虎ハ天樹をすてゝ　ゑまち乃さ金氏を
はいくとなりめ居たり　金氏にしにむりはくいひくる
ゑなんぢすぞ小我吏をつゝぬまゝ家をもひとつ
くらいんと思ふまやといひて弓をもつてもしまかく
里々まれ虎殺にゆけさりぬ　天桂ハ殺入して前婚
を志らさりけるを金氏おふてゝ踊りやうしくにまやう
ちしけまれ夜あけがたに成てまこりゑ殺に法が
なりなりまゝ夜まゝ虎来りて大きにおえて右まゝ
々まハ金氏はえをつき門をひらき虎にしらむりひ
てなんちも又こまゝ性あるものなりなるゆへにかくれなハ
こしきそやといひくれれ虎家のほとり乃梨の木を

かみ〻ゆりまゐるゝ事ハ来いうまで天槎ハなんなくのかれ
よくり
無じて神明のゆるしなけまた虎狼も人をくらふ
ことあたはざ志が海に天槎虎につかまれぬるハ是も
よ無逆なくいかなし千す宿恵の報ひなるへし志かうに
そのつまゝ苦乃誅あるにしたがつくその禍を滅ぬかれ
ぬるゝまきこの乃寄物なりけるがそうけき虎な
逆ぞ女乃おひおとしたがにてあやく知るむへきこ
となくひにもち苦の善心誅あるを神明加護し
あふりしかけくその神威におそれて虎もにけ
さり夫も猶とまぬるゝものなりち苦乃功徳に

てあそうけき虎にかおそれさりぬまばあがつき
明徳上もなく神をなさましと等く候し
つとめおこなふ事し

上冬 伊勢崎 小暮 新町店